

放送人の会

No. 20

2004・8・20 発行

〒102-0094 千代田区紀尾井町1-1 千代田放送会館 3階

Tel & fax 03-3221-0019 Email info@hosojin.com

代表幹事 大山勝美 編集担当 伊藤雅浩、松尾羊一

「現場で語ろう」湾岸集会

大山 勝美

江戸時代、牢名主は入り口にいた。食事の分け前を自分本位で指図できるからである。

六月十二日、フジテレビで催した「『白い巨塔』を見て現場と語ろう」の会場の扉をあけると、石橋冠、堀川とんこう、鶴橋康夫、隣に松尾羊一とウルサ型がずらりと顔を揃えていた。へお、牢名主諸君！と言いかけて止めた。

口の字型のテーブルに約二十四名。牢名主の向かい側に、裁きを受ける科人よろしく「白い巨塔」スタッフが神妙に控えていたからである。モデルの阪大医学部を長期取材した読売テレビの横山英治、声をかけた「視聴人の会」の佐野代表ら五名も出席していた。

視聴したのは第十・回九〇分の特別版。ワルシヤワロケを行い、財前教授の光と影がドラマチックに凝縮されている。ヒューマニズム、名誉欲、教授レース、友情、誤診、人権など重く対立するテーマが小気味よく重なり合う。

全体には、「テレビドラマ久々の収穫」との評判を裏切らない出来栄で、放送人の会賞以降、ATP賞、ギャラクシー賞、放送文化基金賞を総ナメにした風格と醍醐味があった。集会の詳細は次ページを参照してください。

「白い巨塔」をやりたいと五年以上執念をもちつづけた和田行プロデューサーの熱を軸に、原作、脚本、音楽、演技、スタッフと各パートが全力をふるって立ち向かったテレビドラマ史上十年に一度の快作ではなからうか。おわたの拍手は温かく長く続いた。

すぐれた番組は、人の心を豊かに輝かせてくれる。散会后、高揚しほてった身体に、お台場の風はじつに爽やかであった。放送人の会の催しは、どうも外向きが多い。もつと内向きの会員相互の親睦や現場若手との交流を、との声に応える形で今回は試みた。

平均年齢の高い当会だけに、若い現場スタッフとの交流は血が騒ぐ。今後「放送人の会への積極参加を」と誘ったがちよつと性急すぎて戸惑いもみられたようだ。ともあれステップバイステップの心持が必要であるう。

「放送人の会とは？」の問いに、最近「SKKの会です」と答えている。S親睦、K親

究、検証、K親睦、頭彰のつもりである。これまで乏しかったS親睦の要素も、第一回の「現場を語ろう」で成功裡に実現したと思う。

年内に第二弾を考えたい。何だ(S)最初は(K)景気よかつたけど(K)腰砕けか？と言われないうちにも。今度はNHK番組ですかねえ。



『白い巨塔』フジ、共同テレビの制作スタッフ

テレビ人・セッション・第一回

「白い巨塔」をめぐる

討論要旨

司会 司会の荻野慶人です。大阪・読売テレビの出身です。生まれは大阪、育ちは阪神です。今回のこの「白い巨塔」も最初から楽しみにして1回もかかさずつと見ておりました。この期間はガールフレンドから（「飲み屋のおばさん？」の声あり）「今の時間は『白い巨塔』をご覧になっていられるでしょう」とのメールを何回か貰いました。そのくらいのめりこんでおりました。まず放送を文化の目線で見ている集まり「視聴人の会」の方からどうぞ。

視聴人の会・佐野 今日はお招きありがとうございます。私たちは「放送文化基金」の仕事を通じて集まってる団体です。

「白い巨塔」については、私は田宮次郎のドラマを見た世代ですが、今回のドラマは全体として流れがスムーズで、思わすのめり込む感じでした。非常に重いテーマを丁寧に追っています。主人公の財前が人の命をどう考えているのか、いろんなエピソードと人間関係は描かれましたが、個々の密度がすこし足りないかと思えます。それだけが不満です。

視聴人の会・小笠原 初めていきなりこんな凄い会に参加しました。ドラマも放送中にも圧倒されていきました。制作者の

真剣さを感じました。

学生・視聴人の会・益子 面白かったです。最初は出演者が良かったのでちょっと見て、しばらくしてみんなに聞くと受けているので、戻るといのか、見続けるようになりまして。

司会 ドラマはエンタテインメントだといつても、胸にぐっとくる社会性も欲しいし、視聴率も欲しい。その意味ではフジテレビは頑張ったと思います。

では放送人の会の方に行きますか。石橋さんどうですか？

石橋冠 沢山メモをとって、何から話しているかわからないけど、大河ドラマってこういうものだな、と変な言い方ですが、そう思いました。時代劇の大河ドラマ（NHK）がどうもパワーを失っている。最初われわれに与えたインパクトとかエキスポとかは、現代劇だけ見事に大河ドラマになっている。シドニー・シエ

ルダン風というのでしょうか、基本的には江口・唐沢の男の友情でしょうか、二人のスタンスの違い、この構図がまずしつかり張られている。僕は飛び飛びに見ていたのですが、金太郎飴のようで、分かるのです。こんなドラマはえてして、2回くらい見ないと行けない。これだけの快テンポで次から次に話が起きるのだけど、江口・唐沢の軸足がしっかりと書かれているので、何処から入っていても見られる。これはまず見事です。

医学界というのは、とにかく生と死

で、素晴らしい非日常です。ドラマの面白さは対立があり葛藤があり、非日常性が前提である。それが見事に組み込まれている。ドラマが一番人を感動させる要素をあらかじめしっかりと持っている、この凄さですね。

そして背景にファミリー・ドラマの伏線を張っている。僕がちよつと難癖をつけると、このファミリー・ドラマの部分がちよつと弱い。西田とか石坂浩二のよな大ボビュラーの俳優を脇に据えて使うのは凄いいことなだけで、どうも邪魔なだけだという印象はありました。それがだんだんうまくなってきた。いや、西田は最後までまっぴらですね。医学会の「ハマちゃん」演技で：（笑い）それからメロドラマ性をちゃんと持っている。黒木瞳がべたべたせず、知性をくすぐるメロドラマですね。これが上手です。

医療ドラマとホーム・ドラマとメロドラマと、実に贅沢極まりないところに、更に今日の社会性、ドキュメンタリーの持つものをちゃんと持っている。これがまた尻尾を巻きますね。

西谷さん、初めまして。テンポが非常に軽やかで、ショットに重く媚びないところに感心しました。こうしたものはどうしてもショットの重い格調を求めたりするのだけど、そうじゃなかった。ローアングルやひらひらする短か過ぎるショットは気になったけど、全体として見る

側に寄り添って見やすく撮って行く作る技術は大変なものだと感心しました。

司会 では次に放送物書き屋と自称している松尾さん。

松尾羊一 連続ドラマがある種の連続性と連続感によって、われわれが生活の中でつながり、次はどうなるだろう、という視聴習慣がだんだん壊れてきている。

暮れになって、年末に特番枠として今日見た分が放送され、「これから有名な医療裁判につづく」と示唆しながら正月あけにそなえていた。前半の終わり方と誘導性がうまくなかみあい、珍しい2クル方式を維持していた。

ドラマの継続性、連続性をどう考えるかということになるかと思いますが、このドラマ、そして「砂の器」もそうですが、こうした連続ドラマの骨太い継続性に支えられた本格ものを制作費はかかるが続けて欲しい。

横山英治（読売テレビ）クラシック音楽を担当してきましたが、97年から00年まで難波大学第1外科、つまり大阪大学におりました。びっくりしました。志に生きる男たちが熱い思いをぶつけ合っていて、一つの時代を作っていた頃、それがドラマに描かれていて非常に懐かしい思いをしました。

非常にリアリティーをこめて作ってあります。僕らが現実に見たものがどうして分かるのだろうと思うシーンが沢山あります。第1外科の教授室で、屋上から

下を見渡した時、昔の梅田からみた阪大病院が見える。東京でロケされたたま偶然の一致なのかもしれないが、スタッフの思いがそんな奇跡を起こさせたのではないだろうか。メスもレーザもメスを使わず普通のメスを使っている。それも意図があつたことだろうと思ひました。

堀川とんこう 私も毎週見ていました。このドラマは一体何なのだろう、とずっと考えていました。放送が終わった後、業界ではこの作品をうらやむ声しきりで、私はTBS出身ですが、TBSへ行く、編成の人間から「昔の原作ものであれ風の小説は他にないですか？」。つまり「白い巨塔」風のをやりたいと、放送中からドラマの現場は騒然としていました。

物語は古典的なある形です。スタンダードの「赤と黒」に、あるいはドライザの「アメリカの悲劇」に戻るべきなのか？ いずれにしろ一人の男がヒエラルキーに挑んで行く、その男の栄光と破滅の物語です。劇的なものをしっかりと備えた骨格のある物語性がドラマにとつて大切なことだということです。現代のドラマはそんな骨格を失っている。現代の若者たちのドラマは骨格のないところで、恋人を取られたとか、恋人が戻ってきたとか、そんなところでドラマを作っている。そんなところでしかドラマが構築できなくなっている。

北村充史 山崎さんの小説が「サンデー毎日」に発表された頃、この商売（NHK）に入りました。

堀川さんがおっしゃったようにこのドラマの構造は古典的で、ギリシヤ悲劇以来ある権力闘争の構造をパチッと現代にあてはめています。昔、ギリシヤ悲劇では神と人間の対立だったのですが、20世紀あるいは21世紀初頭ではそうはいかないでしょう。アウシユピッツが何故あんなところで突然出てくるのか分からないと思わせるのは、そんな意味で現代的です。

先週WOWOWで「白い巨塔」の映画編をやっていました。40年ぶりに見直して、なるほど、何故これがうけたかという、皮肉に聞こえるかもしれませんが、40年間人間がちっとも進歩していないからだ、と思ひました。全く同じなんです。映画の場合は田宮次郎と、荻野さんがさつきおっしゃった里見は田村高広がやっています。物語は実に分かりやすくはつきりして、最後に財前の側、権力の側が勝つ、という原作通りの結末です。そこは現代のドラマと違うところですね。

司会 鶴橋さん、どうでしょう？
鶴橋康夫 昭和30年代の日本は幸せだった。あの幸せなニッポンはどこへ行ったのだろう。僕は読売テレビに入って、それから東京へ来るのだけだ……
山崎豊子さんのテーマはいつもそう

だ。片側に……どの時代になっても変わらない人情と人間関係があつて……

おれの家族を助けてくれ。里見だつて、廊下で泣いてる暇があつたら、もうちよつと何とかやれよ。（笑）

われわれも「間違つたら間違つたで、もう少し何とかやれ」と、上昇志向の30年代の序列ではそうだった。今はもっと悪くなつてゐるだろう。その悪くなつてゐる部分をこのドラマはちゃんと捉えている。

このドラマの映像には小さかしいローアングルがない。小さかしくカットを変えたり、3段撮りをしない。目のクローズアップがない。後ろにバックライトがない。ハンディカメラを使ったのかどうか知らないけど、説明的な絵作りを排している。山崎豊子さんのドラマはとにかくデイスカッションなんだ。「はい、教室へ来ました。はい、デイスカッション」、デイスカッション、デイスカッション、君はハーバード出たのかね？何年？」もデイスカッション。

引きの画は要らないよ。……退屈しないドラマだったよ。

久野浩平 ATP賞の審査で見て、これで3回目です。みなさんの言ったことはみんな正しいが、ただ一つ、私は、ふと台本が見たくなつた。陶酔させられる、その感じがありません。昔はちよくちよくあつたのですが、最近陶酔して見ることはあまりありません。芸術祭参加でな

くてこんなドラマができたのは嬉しいことです。

石橋 これ、最初から21回の予定ですか？

和田行（フジ）終わりの頃になって2クールやらせてくださいということが通りました。

石橋 そこが凄いな。

鈴木典之 ドラマとドキュメンタリーのウオッチャーでありたいと思う一人ですが、一人の人間が持っているストーリーを闇の部分も含めてきちんと連続して描いて行くのがドラマの基本でしょう。二人の対立を描くこのドラマを見ていて、「ああ、井上由美子さんのホンだなあ」と思っていました。井上さんは人間の二重性、闇の部分を描いたらうまい。

私も北村さんと同じくWOWOWの映画を見て、60年代の社会派の描き方だな、と思ひました。人間の対比もみんなそれ（原理）で処理しています。財前が最初から最後までカリスマ。しかし今度のドラマは何イズムと言うのでしょうか？状況に応じてワーッと盛り上がり、最後には対比する人間関係の中で決着する。それで見る側は納得します。

報道サイドの社会の事件ニュースを見ている、人間のストーリーが欠落していると感じます。その意味では、昭和30年代、右肩上がりのよき時代、向上心に燃えていた日本人の精神性にもう一度立ち返るところにしか、骨太の人間ドラ

マは生まれないのかもしれない。中澤忠正 諸先輩と違って私はドラマの経験がほとんどありません。

皆さんもお感じになっていると思いますが、映像のテンポ、リズム感もさることながら、音、台詞のリズム、そして音楽に感心しました。一方でメロディーを感じさせない音楽が流れ、時にメロディーが浮かびあがってくる。何故ワーグナーが浮かびあがってくるのか、ある意味で意味深長な音楽がぶつけられているのに驚きました。

北村 財前がワーグナーの「タンホイザー」で手術室に入るが、後でアウシュビッツが出てきて成る程。ヒトラーはワーグナーが凄く好きだったから。

石井清司 私は40年ほど組織の外で、フリーでやってきましたが、このドラマは組織の中で、迷い迷い、常に判断が求められる組織人のドラマで、前へ出る人と引く人とあつて、毎回毎回「引いちゃいかん」と感情移入しました。

高橋さんからでしたか、「白い巨塔」をやるんだと言われて、どうして？どこで決まってる？とびくりしたことがあります。

和田（フジ）企画の経緯は簡単です。前から「やりたいなあ」と漠然と思っていた、快くかどうか分かりませんが、あげてみたらと、するりと通りました。

高橋（共同テレビ）気がついたら連続ドラマをやっている、西谷や和田では先行

して話ばされていたのかもしれない。一緒にやりましょうと言われたときは本当にびっくりし、たいへんだなあと思いました。

各務孝 私もこの「白い巨塔」はうちにいる限り見ていました。結末は想像のつくところで、財前となにがしの関係はどうというとはなくて、むしろ脇の人、例えば黒木瞳さんの役、あれはホンによろのだと思いますが、非常に新鮮に感じました。他の人物像は色分けがはっきりしています。黒木さんの役はどうにでもとれる。あんな面白い人物像が出てきたことを私は面白く思いました。

松尾 前作の太地喜和子はいかにも高級バリのママ然とした風俗描写が多かったが、黒木は前身が女医という影が効いていた。彼女の怨念、そして財前の上昇志向への危惧、結局彼女がドラマのキーウーマンだったという誘導が説得力をもっていたと思う。

堀川 もう一つ言いたいことですが、日本の権力構造はもうがちに出来上がっている。内部告発を待つかないかと思っていた。それは雪印の時もそうだし、各種食品会社、警察の裏金作りなど、かつてのそれ行けやれ行けの時代には、日本人は内部告発なんてとても出来なかつた。それが最近では、大きな企業の中の小さな良心がひよっとすると何かをするかも知れない、あの巨大な「白い巨塔」の中にも小さな良心はいくつかあ

って、それはひよっとすると力になるかも知れない。

石橋 全く同感で、財前亡ぶ、江口勝つだろう、情念としてね、ということがお客にわかっけて行く、それがこの作品の強さだとおもいます。

それから、連続ドラマ。僕は窓が開いて行く連続ドラマと窓が閉じて行く連続ドラマとの二つしかない、と思っ

す。物語性の回復等々というのは、結局その窓の開け方の問題じゃないか。「渡る世間は鬼ばかり」は窓が開けっ放しで、窓がない感じがします。今回窓の開いて行き方が上手だったなあと思いました。じゃ、窓が閉じるとはどういうことかはまだよく分かりませんが：

司会 かつての現場放送人の集まり「放送人の会」と、ドラマを定点観測してくださる「視聴人の会」合同の「白い巨塔」をめぐる論議から、連続ドラマどうあるべきかまで、評論や審判とは違ったユニークな話し合いでした。最後に当会代表の大山さんから：

大山勝美 「放送人の会」は民放キー局とNHKそして地方の現場人で構成されていますが、どことなく「放送界の名球会」などと皮肉られています。決してそうではなく、きれば血の出る現場との連帯を考え、放送文化の継承をどう実践しようか、それも「放送人の会」の大きな役割だと考えまして、幸い編成制作局長

の山田良明さんの賛同と協力を得まして、放送現場との交流第1回の作品のVを資料映像として挿入する異色のフォーラムを開催できました。これを機に各局にも呼びかけ、ドラマに限らず「原人と現人」の相互交流の会合を続けて持ちたいと考えております。本日はまことにありがとうございました。



左2人おいて 堀川とんこう、石橋冠、松尾羊一、萩野慶人（司会）、鶴橋康夫

放送人・2004・夏

合川 明

▲古都「リヨン合唱団」の美少年が七夕から我が家に4連泊。何度か風呂呂水を抜かれる。裸でアイロン掛けのペチャクチャがかわい。朝の納豆、みそ汁もペロリ。お礼はきれいな「赤い靴」のハーモニ。世界中どこへ行ってもホームステイが国規とはえらい▲北村カッちゃん「花咲くチエリー」俳優座「蒼き馬たち」大オツカレサマ▲名古屋の遺画展銀座で。「はち巻岡田」では文士野沢、渡辺、杉山義法を悼む▲村松友規「今平」犯科帳「シャープな現代監督論。読むべし。豊川のダダツ子「丹下左膳」異質でもオモロイ。ブラビの「トロイ」女優陣貧弱で、豊満口ツサノポデスタの「レン恋しや。「ドックビル」キッドマンとあのローレンバコール！「フオーンブー」サザードの機知見るべし▲BS日本一周一筆書きの鉄道の旅42日間、愉しむ。関口君「くろうさま。「道路公団」(NHK)迫力不足。日テレの「三菱ドキュメンタリー」の方が教段上▲ドサ競馬、マジヤンもしんどのい▲名店「翁」も有名になって満員、一人酒ムリ。団地の「すきやばし次郎」大ちゃん店。らもさん偲んで町田の場末で千ペロとはいかぬが三千円でたっぷりうまくて、気風の良い夫婦の店「鳥長」へいらつしやい！

青木 裕子

暑中お見舞い申しあげます。

NHKラジオセンターの本業に加えて休日を利用してのチャリティー朗読会をつづけています。

●8月16日(月)夜6時半開演。キッド・アイラック・アート・ホール(東京・明大前)。「宮沢賢治短編集より」

●9月25日(土)午後1時開演。すみだ下リフオニーホール(東京・錦糸町)楽団あぶあぶ&ミュージカルチームLOVEに参加

●10月16日(土)「詩人桜井哲夫さんのトークと詩の朗読会」信濃デッサン館分館

●11月11日(木)「ラジオ文芸館のつどい」に参加。弘前文化センター

エムナマエさんの画と私の朗読CD2枚セット『銀河鉄道の夜』好評発売中！とあつかましくも、自己PRさせて頂きました。

石井 清司

7月18日、長野・小淵沢。柔道アテネ代表合同合宿、ウォッチング。

8月11日～18日、アテネ五輪。

石橋 冠

オリンピックに熱中する夏です。それにしても、日本の国歌はなんとかならないものか。中国でのプーイニングにも決然として鳴り響く音色と、胸を張って歌える内容に…。

浦田 彰

「退役放送人・隠居の練り言」
①脱走兵に何でチャーター便なのか？
日本の情緒に迎合しないで日朝米のキナ臭い外交のリアリズムをチャント報道してくれ！

②灼熱東京は一過性なのか？
地球温暖化との関連で庶民は理由ある恐怖におののいている。予報士の中に現代の寺田寅彦はいないのか！

③没後100年でもひばりサンなのか？
放送では原則として物故者には敬称をつけないと教育された。なぜ歌手だけがあの世に行っても○○サンなのか？「歴史」が面白いになるのでは？

江口 展之

①この3月、日本大学大学院修士課程を修了しました。総合情報研究科国際情報専攻というものです。ブロードバンド利用の通信制ですが、合宿等で顔を直接合わせることも多く、2年間があつという間でした。

②この5月、10年前に企画し、スタートさせたある番組が200回で終了しました。

した。「私、この番組を見て憶れて受験したんですよ。他にもいますよ。」と聞いたのが3年前でしょうか。そう言ってくれたスタート時小6だったという彼女は今や立派な舞台人。テーマ曲を歌ってくれた女性もこの程、年下のラガーと結婚。月日は流れますね。

大蔵 雄之助

美術館桂林で収蔵品を、紫檀、黒檀の飾り棚ごと払い下げるといふ。

一昨年のSARS、昨年の鳥インフルエンザのために日本人観光客が激減し、市当局は財政難に陥った。手っ取り早いのは人員整理であるが、美術館は学芸員を解雇するかわりに、展示しきれない在庫品を売却することにした。対象品はすべて篤志家が寄付したもので、購入価格が強み。1ケースに10点の陶磁、鉄青銅、玉瑠璃の製品(主として明・清時代)が配置してあり、配達・通関の費用込みで二十末広がり八八万円。一つ一つに保証書がついている。

「義を見てせざるは勇なきなり」の男心で早速契約。今は「何でも鑑定団」が頭をかすめる。

大山 勝美

7月、世界遺産登録の「熊野古道」に触れんと那智火祭りを見る。ふた抱えある松明10本、冷気帯が山道を白装束の男性運ぶ。勇壮なり。時折観客の方によろけて火の粉を散らす。悲鳴あぐる人々。聞けば火の

粉あびるは魔よけに通じると、古来慶事と喜ばれるとか。果敢なる女性カメラマンあり。写メールなど掲げて人をけちらす。ビデオなど男性プロカメラマン数人集団で移動す。一人の中年女性、カメラを手に「一寸じゃま」と男性プロカメラマンをこすく。小柄の彼哀れにも倒る。女性は無視、平然として己が撮影に没頭す。振り返れば那智の滝。岩間より次々と水流猛々し。ああここは女神の聖地なるべしと、女性の傍若無人の振る舞いぶりに乍しく納得せり。呵呵。

大類 啓

松尾大兄に一喝され、5月に入会しました。新参者ですが、お世話になりました。現在番組制作会社に山形放送から出向しています。40人の社員とともにキー局や在京制作会社からのロケ依頼や地元複数局の番組、CM制作に汗を流しています。

出向以来3年余になりますが、制作プラス企画集団を目指し、体質改善を図りつつあります。最近の成功例としては16年度民教協スペシャル最優秀企画賞を受賞しました。当社が企画し、山形放送が提案しました。ドキュメンタリーのタイトルは「あなたまた戦争ですよ」で、すでに撮影に入っています。

景気回復の大合唱が響いています。地方や中小企業にとってはまだ遠い太鼓です。皆様からご用命があれば喜んで承ります。(東北映音社長)

岡 弘道

NHKを定年退職して17年。5白治体、4財団、2会社、2学会、3大学、2芸術創造団体、1幼稚園等々に関わりながら「地域の文化振興」をテーマに、様々な現場活動を続けてきました。

台東区の「奏楽堂日本歌曲コンクール」(NHK等後援、1990・平成2年発足)は、いわば日本語数千年の歴史と、近代日本が受け容れた異文化、「西洋音楽」との接点「日本語による芸術歌曲」のコンクールとして定着しています。

インタナショナルな声と姿で繰り広げられる競演のすばらしさは昔日の比ではなく、文化財としての「日本歌曲」の存在感を強めています。年齢制限がないので、70〜80歳代の名唱にも接し、心が洗われます。(第1位は賞金150万円と金メダル)

その他「すみだトリフォニーホール」8年、「めぐろパーシモンホール」4年、幼稚園(学校法人)38年など、継続を楽しんでいます。

お陰様で元気に立秋を迎えました。

荻野 慶人

参院選直前に、曾我ひとみさん一家がジャカルタで再会できる妙案が整うと「選挙へのパフォーマンス!」。経営難のプロ野球に合併案が持ち上がり、パフアローズを買いたいと弱冠31歳が名乗りを上げると「売名行為!」。劇場型でテレポリティクスの時代だ。「選挙に勝つ」「企業名を売り込む」ことに遠慮は要るまい。ニセモノは大衆が淘汰する。

韓国映画「ブラザーフッド」で、主人公は朝鮮戦争の只中に英雄を志して銃をとるが、それは正義のためでも祖国愛でもなく、家族愛でしかなかった。今はアテネ・オリンピックの真っ只中で、金メダルで名を挙げるのはハングリー・スपोर्टマンの夢だ。

僕たち「放送人の会」も、意気軒昂をアピールして「売名」とか「サブライズ戦略」と誇られてみたい。

荻野 靖乃

最近、若い人たちと話していると歴史感覚というものが全くないことに驚かされます。これは学校教育で、歴史(特に日本の近・現代史)がきちんと教えられていないということでしょうか。

心配することはない。彼らは貴方の知らないことについて十分に知っている」と友人は言いますが、かなり気になるところです。

勝部 領樹

この夏のこわいホラー連想の一つ。黒覆面の武装テロがテレビの画面で人質を前に脅しの通告。見慣れたこのテロの図式が、世界同時中継時代のテレビを通して、ほかの世界にも伝染し増殖する…。それほんとは?

35、6年前の東京のデモ学生のスタイルは、ヘルメットにグバ棒に道の敷石。これがテレビニュースであつたという間にパリの学生街のカルチエラタンに飛び火した。そこに殺しのテロはなかったものの、テレビの伝染模倣の効果の大きさは興味悪いほどだった。

加藤 滋紀

大学の教師になって2年目、ゼミ生と大学内を取材して「ドキュメント・目白大学」という映像作品の制作に取り組んでいます。学生たちは撮影も編集も未経験です。私の作戦としては、取材対象である大学をどう見るか、また取材協力者との人間関係をどう作るか等について考

えるのに多くの時間を割き、撮影についてはわずか1時間の講義をしただけでロケに入りました。結果的には学生たちはカメラをオモチャにすることなく、対象にしっかりと向き合いうまく撮影しています。私としては手応えを感じています。秋の文化祭までの公開を目指し、編集作業に入りました。

川平 朝清

6月中旬から7月中旬までアメリカ短訪しました。折から大統領選挙運動の真っ只中。毎晩ラジオのトーク番組聴取。パーソナリティーが電話応答する形式は今なお盛ん

で、ローカル局ではブッシュを支援するパーソナリティーにケリー支持のパーソナリティーが入り混じって盛んなものでした。日常化しているのは明らかで、聴取者の意見は害してアンチ・ブッシュ。それもそのはず。一般大衆は金持ち優遇政策をとるブッシュにかんがりの反感があるようでした。しかし一方「アメリカ大民主義思想」もあらわで、この点ではブッシュ支持とアンビバレントな大衆意識の存在もありました。帰国してTBSラジオの「アグセス」が実に健闘していると思えました。先日などは竹中大臣が出演しての応答など、また聴取者の参加も活発で聴かせました。

川口 幹夫

二つの財団で夏に仕事をしました。カゴシマ、霧島アートの森で「オノヨーコ展」そして東京明治神宮で「杜（モリ）の中の伝統文化」の二つです。

オノヨーコ展は若い女性を中心に記録やぶりの観客がおしよせました。杜の中の伝統文化はまずまず好評でした。テレビももっと若い人の心にこたえるものを作ってほしいですね。いいものを作ると人は集まってくるのです。「いいものはいい。ダメなものはダメ」なんです。

川竹 和夫

先日、「放送人の会」事務局に来ていた小坂理沙子さんが出演している小演劇

(劇団タコあし電源)を見にいった。「阪神淡路大震災」がテーマで、1ステーションで、いろいろ入れ替えシーン。とにかくこの芝居、大震災から1年の間に神戸で起こったもろもろを綴ったルポ風のもので、現場の問題の焦点を巧みにとらえた迫力あるものだった。「東京から来たハイヒールはいたりリポーター」「どうしようもない役所仕事」「ボランテアにもいろいろある」「自衛隊おくれて到着」しかし装甲車は迫力十分。「よくやったサンテレビ」「東京の地下鉄サリン事件以後、神戸へのマスコミ関心薄れる……」など。みんな関西弁の上手なこと。小屋は20前後の男女で超満員。とにかくエネルギー十二分の公演だった。むろん、小坂さん、中々の熱演でした。

岸田 功

高齢化現象で日本の社会も同窓会流行りですが、今春も東大新聞研(前社会情報研、現大学院情報学環)同窓会(会長・一方一大)を設立しました。一匹狼のジャーナリストの「同窓会」はあまりなじまないのですが、なぜできたのかそのいきさつは「同窓会報0号」に詳しく載せましたので興味のある方には贈呈いたします。岸田まで一報ください。

北川 泰三

広辞苑に「古稀」とは「70歳の称」とある。杜甫の曲江詩「人生七十古来稀」が語源という。昔は70年も生きたら大騒ぎしたのか。

それとも嫌われたのか。私も古稀になった。運命のいたすらで教壇に立ったが、来年は退職する。研究室を見渡すと「テレビ放送論」の講義に使った検証映像ビデオが何千本、否、何万本あるのだろうか。1989年のベルリンの壁崩壊から、湾岸戦争、ロス暴動、オウムサリン事件、酒鬼薔薇、毒カレシ、狂牛病を経て、9・11同時多発テロ、アフガン戦争、拉致家族、イラク戦争まで、NHKと民放のあらゆるニュース・報道番組と、その時の主なドラマ、ドキュメンタリー、バラエティー、スポーツ中継等が放送同時録画の形で残っている。想えば貴重な映像記録である。時を経るに従って、この記録の学術的資料価値は高まるであろう。将来の放送業界を志す若き後進の研究材料としてこの映像資料が広く活用出来るように工夫したい。

北村 美憲

わが日本国で8月は特別な月です。8・6や8・9や8・15をマスメディアが取り上げて「風化」を嘆くのが常ですが、それによって60年になる1945年のことでしょうか。関心が薄らいで当然です。そのまた60年前は1885年(明治18年)。日清戦争の10年前。それがどれほど遠い昔だったかを思い出してみればよい。昔のことで意味があるのは独立記念日ぐらいでしょうか。2・11でゴマ化して、その大事な記念日をわが国では持つてないのが重大問題なんですよね。「華氏911」に倣って「摂氏246」を考えたら?そう、日本が小泉内閣に襲われた日のことです。

楠見 昌

殆どハワイにて生活して居ります。お小遣いかせぎで時折日本に帰って来て居ります。作家の花登筐さんの原作権を全て保管しておりまして、舞台公演の営業をして何とか年金以外で収入を得て居ります。中々面白い作品が多くて、東京、名古屋、大阪、九州etcで案外売れて居ります。放送人の会の中でプロデューサーの方々、その折は是非よろしく。TVだと視聴率は取れるし、舞台は、お客さんに大変喜ばれて居ります。来年2005年の12月まで決定しているものも有りますが、よろしく。

寒河江 正

「消えない記憶・消せない記憶」冬のソナタで沸く日韓。私は同志社大学OB男性合唱団のメンバー(36名)の一人として今年5月の半ば、3度目の音楽交流の旅を体験した。我々男性のメンバーは46名。プログラムは宗教曲、日本、アメリカ、韓国の各民謡を、合同演奏ではモーツァルトのアヴェ・マリアを100名近い混声で歌った。今回の栄州市(人口10万人)は前回と同じく、ホームステイを準備して呉れた。日本のテレビ(大阪のケーブルTV)メディアが「同行取材」と聞いてか、市長はじめ多くの地元文化人が市のホール(定員700名)に來られ、我々が歌う歌に耳を傾けて呉れた。これは私と北朝鮮で終戦を迎え、当時中学生だった韓国人の羅逸星氏(延世大学名

普教授・天文学」と45年ぶりのソウルでの再会が縁になった。羅逸星氏は榮州の隣の自宅天文館の広間で、我々合唱団を前にこう語った。「日本と朝鮮がよく関係のあったことは若い学生によく話します。しかし当時は朝鮮語は、一切禁止。ある時朝鮮人のクラスメイトが授業の休み時間、仲間と朝鮮語で話をした。日本人の生徒が、朝鮮語をやめると怒鳴った。咄嗟に班長の寒河江君が怒る彼に『朝鮮人が朝鮮語を話して何故悪いのだ』と大声で抗議した。戦後私がアメリカに留学した折も、又韓国に戻ってからも頭にいつも彼の行方が気になって戦後、寒河江君を尋ね人として探したのです。45年ぶりの再会では語ってくれなかった初めの言葉。私の記憶には全くない。それまで私は彼との再会が、中学生時代の日本統治時代のよき郷愁の思いからだと思っていた。この時、私は歴史認識の甘さに気付いたのだ。

翻つて8月7日のサッカー・アジア杯の中国人の反日行為。理解しよき関係を作ることにも異論はないが、『消えない記憶・消せない記憶』もあることを反省しなければならぬと思う。交流には経済と同時に文化にも目配りをする配慮が必要である。音楽の文化交流は我々の後輩のメンバー、歌を愛する私の孫にも繋げていきたい。

桜井 元雄

「山中政治さんを偲ぶ会」(7・16)で聞いたテレシス・プロの湯口浩氏のスピーチに心打たれた。NHKでアナ

ウンサー、報道、番組ディレクター、海外番組の日本語版制作者など40年以上のキャリアーの持ち主山中さんにとつて、湯口氏は「長男」だったそうだ。親子以上に歳の隔たった湯口氏に向かつて山中さんはいつても「僕たちはモノ作りという」仲間「同士だ」と語りかけ、湯口氏はそれに感銘を受けたという。至極当たり前のことなのだが、この山中マインドがNHKに本格的に導入されたのは1980年代後半のことだった。86年夏、私は時の鳥桂次専務理事から「お前、明日からかつぎ屋になれ」と命じられた。「NHKの番組を外国市場で売り、その売上金で外国のすぐれた番組を買ってきてNHKで放送しろ」という訳だ。山中さんは私たちがかつぎ屋が仕入れてきた素材を調理する脍炙の頭領。大勢の若いディレクター群が彼の回りに集まった。大半が独立プロの人たちだった。やがて同様の動きが国内番組に広がった。テレビという表現手段を広く内外の「仲間」に開放せよ。公共放送の役割の一つだ。それが鳥構想の基本にあった。

菅野 高至

猛暑に負けることなく、只今、金曜時代劇「慶次郎縁側日記」(連続10回)を制作中。なんと7月20日の異常高温の日、運悪くロケ。主演の高橋英樹さん「時代劇のロケって言うとなぜか、暑い時が寒い時しかやらないんだよね」と思わず嘆く。時間と共に動

きが鈍くなり、集中力が途切れそうな中で、よくぞ撮り切ったと、キャスト、スタッフに感謝！放送は8月27日(金)夜9時15分。いつもより、少し辛口に、ハードボイルドに仕上げております。どうぞご覧下さい。

鈴木 典之

目下の秘かな銷夏法は江戸切絵図で遊ぶこと。

好きな藤沢周平の江戸市井ものは地名や町並みがくわしく正確なので、いつの頃からか切絵図で照合しながら臨場感を楽しむようになった。

「蝉しぐれ」で井上ひさしさんが「海坂藩」城下図を創り上げた、あの嵌りようです。

今は、本所・深川一帯の古図を拡張、江戸のハードボイルド「彫師伊之助」の動きを改めて追いつきながら、つい猛暑を忘れていきます。

武谷 雅博

NHKハイビジョンで、ナチに収監された子供たちが刊行した「V.I.D.E.M.」の番組を見ました。(翌日はアウシュビッツの音楽家。この種のものに、やはりNHKの「パレスチナからの報告」や、昔フジテレビから放送されたQ&A7があります。本当に考えさせられます。テレビがくたたらなくなつて行く中で、国民は「知る権利」とともに「上を向く権利」があると思つていきます。「良い話」というのは記者発表がありません。クラブの発表にかなりを依存している今のテレビには、心を打

つ、感動させる、考えさせるような番組は、各局とも自分で掘り起こすより他ありません。

規制は望ましいものではありませんが、たとえば「良い番組」を放送する時間比率を「放送人の会」として実現させて行くようなことはできないでしょうか？そしてその中から「特に良い番組」を表彰するのです。錚々たるメンバーの揃う「放送人の会」が、番組を良くするために無力であつてはならないと思うのです。

田澤 正稔

「三つの光景、三つのコトバ」

その一、「至近弾がビュンビュン飛んでくる」――大山勝美さん。篠原庸さんを偲ぶ会。

その二、「これまではひとのことぞと思ひしが俺のことはこれかなはぬ」――自宅の病床からなぜか霊柩車で病院に移されることになった車中で、父、心境を江戸の狂歌に託す。

その三、「良馬は走らず。良扇は煽がず。良箒は掃かず」――原沢弘さんが赤坂テレビスタジオの社長室に掲げていた色紙、占谷綱正さん、書く。

田原 茂行

先日「アルジャジーラにできない番組」という題で地域局の報道番組を紹介しました。アルジャジーラは最近、欧米人の感情に留意し、真実・公正・バランスを重視し、宣伝・憶測を報道する民に陥らないよう注意する倫理規定を発表しました。

しかしこの局の弱点は、自国カターの報道が政府に強く規制されて自由がないこと、外からのイタダキ映像が自局のメッセージの代用品になっていることです。

いまやテレビは嫌でも状況の当事者、加担者また状況を変える存在です。発表やイタダキにせよ反権力や政治的公平の水準で商売をするだけでなく、白らの努力で現実を掘り起こし、異なる立場が、問題解決の論議を深める「場」をつくる積極的な役割を担うことが必要です。

今年STVの「どさんこワイド」、RBCのニュース、MBCの「小さな町の大きな挑戦」、OXで5年続く「CATCH」などを拝見し、その役割をいま見せているのが日本の地域局の番組だと感じています。

土居原 作郎

NHKをはじめ最近の放送業界の出来事は憤懣やる方なしの思いです。様々な原因はあるにしろ、一口で言って現場の士気の低下がもたらしたものです。スタート当初は決してあり得なかつたこと。あの頃のやる気にあふれる熱気はほつておいてもいやが上にも盛り上がっていました。昨今のそれは手をこまねいては決して向こうからやってくる状態ではありません。一人一人がよいものを生み出そうとする創意工夫が、努力が要求されるのです。ドラマをはじめとするテレビ番組作りの特長は集団創造です。一分野だけでは決して得られない質の高い感動があるからその集団創造です。頑張ってください。

皆様、「ワトリはハダシだ」(存知でしょう)か。森崎東監督の最近作です。これはエキサイティングな映画です。

知的障害をもちながら人並みはずれた記憶力のある15歳の少年・サムとチチとハハとの物語ですが、ストーリーや内容は単純にして複雑。ここでは省略しますが、サム15歳(浜上竜也)の笑顔はあとも良いです。原田芳雄も倍賞美津子も石橋蓮司も柄本明も、それぞれリッパに歳を重ねた(うまく歳をとった)存在感です。塩見三省や李麗仙も出ています。

35年前の森崎監督の第1作「喜劇・女は度胸」の衝撃を思い出させる快作です。秋にイメージ・フォーラムで「疾走」のロードショーだということ。

土門 正夫

20世紀、最後の年に、50年間喋り続けた現役を退き、浪人生活も4年目にいった。いまは時折り出掛ける講演旅行に家内を同伴し、ずっと、やりつ放しであつた家内に謝罪の意を込めて旅行を楽しんでる。先日も青森の酸ヶ湯温泉(千人風呂で有名)で湯治気分を満喫しながら、家内〇〇歳の誕生日を祝ってきた。他に健康法としては成るべくストレスを残さないことだ。その為には極力見る時間を少なくすることになっている。とにかく煩い、内容空虚、言葉の汚さ……等々、イライラの連続だからである。体

に悪い。いまも各界でご活躍の方が多く中に、こんな暢気な会員が居てもいいものかと静かに反省の毎日である。

言葉が大切にされない今の時代が心配です。

中澤 忠正

マメ科の植物には「葉枕(ようちん)」という巧妙な仕掛けがあるのだそうですね。草のつけ根の葉柄の一部が膨れたりしぼんだりして、葉の角度を変え

今年、ビキニ環礁で第5福竜丸がアメリカの水爆実験の放射能を浴びて50年。私は今、福竜丸の元乗組員大石又七さんの築地市場に「原爆マグロ」の塚を建てる運動を支援している。

有名なのはネムノキの葉が夜になると「眠る」例です。クズ(葛)の葉にもこれがあり、夏の夜などは葉を垂らして放射冷却を防ぎ、昼は葉を立てて強すぎる光を調節する。葛の葉は秋の風でひるがえる様子を「裏見」と「恨み」の掛け言葉に使うのが古今集の昔から確立した

NHKが放送した50年目のマーシャル諸島では、アメリカが島民を実験のモルモットに使ったという疑惑が広がっている。さらに福竜丸の乗組員の半数以上、12人がすでに肝臓ガンで亡くなっているが、未だに放射能との因果関係は明らかになっていない。

作歌手法になっていますが、実は夏でも(最高気温記録更新の夏ならなおさら)みずから葉の角度を調整してたんです。見習わなからや。

マスコミの、この50年の有り様と、これからの有り様を考えさせられる夏である。

中津川 輝夫

「言葉が大切にされない時代」カタカナことばがあふれ、短縮語が飛び交い、変なアクセントの喋り方がまかり通る。日本語は時代と共に変わるものだと座視していいのでしょうか。

御無沙汰しております。当地、福岡市も連日猛暑続きでグロッキー気味です。東京での勤務中、放送人の会のおかげでいろいろ素晴らしい作品に接する事ができて感謝致しております。6月末に本社に戻りまして制作の仕事を担当しております。今後とも御指導頂ければと思っております。宜しくお願ひ申しあげます。(RKB毎日放送)

一方TV・ラジオからはBGMや効果音と称する過剰な音があふれ、肝じんな人の声が伝わってきません。

永森 良孝

そして、時・所を選ばぬ携帯電話の音が、人の神経をいらだたせても誰も何も言えない……

長沼 士朗

夏五句

南風強し二艇櫓で往く渡舟かな
水槽を攀ぢては落つる子亀かな
撮影の終了告ぐる声涼し
親指を立ててウインク日焼顔
寝惚けたる一匹の蟬真夜に鳴く

原田 庸之助

「チャンバラ考」

映画の豊川悦司の「丹下左膳」を観た。テレビの中村獅童の左膳よりずっと面白かった。衰退した西部劇に比べ、日本映画には、小説や過去の映画で培われた材料が無数にある。「七人の侍」「用心棒」のシナリオがハリウッドに買われ、最近ではたけしの「座頭市」が海外で評価され、逆にトランシーノ監督がチャンバラ映画「キルビル」を作った。白刃のきらめきに魅せられたものと思う。日本の時代劇もじわじわという感じで復活の兆しをみせている。老人の郷愁に限らず、卑劣なことの多過ぎる時代に、若者たちが武士道を支えにしたチャンバラに拍手を送るのを期待したい気分である。

福田 雅子

放送人の会・例会に出席したいと思いがら日常に追われてのへ挨拶です。

「いまの仕事」

イ、京都市・府が建都1200年を記念して設立した(財)世界人権問題研究セ

ンターの研究員として10年目、国際人権などの視点に学びながら講座の企画や機関誌の編集を。

ロ、NHKラジオの「ニュース解説」をジャナリストとして全中、ローカル放送に出演中。

「これからやりたいこと」

「タイトルは」歴史を紡ぐひとりとして「一文字をおぼえて夕焼けが美しい」「風よ陽よ墓標に」そしてアイヌのおばあさんにうたって貰った子守うた；仲間と制作したドキュメンタリーで出会った人たちのいまをさかせていただきたい。

藤久 ミネ

ものなべて灼くるがごとき熱気のなか、民間放送連盟賞の地区審査に通った。ここでの番組との出会いが、私にとって一種の銷夏法でもある。

炎天の喜雨のように心を搏たれた三本(視聴順)は以下の通り。①『山小屋カレ』(CBC)。三重県御在所岳の山小屋を二人きりで経営する94歳と92歳の夫婦の記録だが、旅路の果てはかくありたい。題名のさりげなさと乾いた表現の巧みは名作『えんがわ』に比肩する。②『路上が我がヒノキ舞台』(福岡放送)。チンドン屋の路上芸に賭ける人々のおもしろうてやがて哀しきいや夢多き人生に感動する。③『アゲイン』S.T.復活に挑んだ760日』(静岡放送)。日本で唯一、定期的にS.T.を走ら

せている大井川鉄道の人たちがS.T.復活に精魂を傾ける。最近こんなすばらしい顔の日本人群像を見たことはない。

星田 良子

先日、愛犬と仲間と、10数年ぶりに、クルージングを楽しみました。初島までの小クルーズ。でも透明度バツグンの海で犬共々泳ぎ、眺ね、ビールを痛飲し、五感の刺激を一杯あびた次第。

やはり己等は動物だ、と実感。頭使わず、体使う心地よさ。さあ：老後はこれだ：と定年退職後の人生設計着々の日々であります。(共同テレビ)

堀川 とんこう

昨今、周囲に俳句熱高まる気配。真似て試みた処女作五句。添削を乞う次第。炎昼やなぎの人江の殺意かな

青あらし小さき門を踏みまたぐ
群れ咲きて夾竹桃南風を迎えうつ
黒々と山の端半月笑い声
冥府めく雨の人江の遠火花

敦煌

宮脇 巖雄

昨年の「著作集」3巻の上梓に引き続き、この六月には五番目の句集『右近』を出版した。タイトルの「右近」はギリシヤン武士高山右近にちなんだ命名で、「放送人の会」にも一部献呈させて頂いた。句集の中からの一句。

「ガウデイの塔まなうらに青き踏む」

白夜

宮川 鑛一

こよなくパリを愛したエッセイスト早川雅水さんが亡くなられた。国文学の池田弥三郎門下に学び、18年に及ぶパリ第三大学の職を終えて帰国され、さてこれからのという時の急死である。

芝居を見る目も人を見る目も実に正確な先輩だった。65年の生涯を終えた3月31日は奇しくも、早川さんが最も好きだった名優、六代目中村歌右衛門の命日にあたる。

早すぎた早川さんの死だったが、84歳の大成功とついに黄泉の国で出逢えたことだろう。

諸橋 毅一

テレビの選曲、音響効果を担当して早や40年あまり。この頃とても気になり腹立たしい事！特に民放各局の夕方のニュースの特集、ドラマ、バラエティー等番組の内容に大いに不満。購買力のある若い女性をターゲットにした企画が多く、視聴率を上げる事を最優先する事により各局、題名と出演者を変えただけで同じ内容のチープな番組が非常に多い。小手先のテクニク(テロップ)に頼る。過剰な音楽等)に頼り、本来最も重要な企画力、創造力、責任感が希薄に感じられる。プロデューサー、ディレクター、作家

の力量が少ない為か？本当のプロフェッショナルが番組を創つてない様に感じられる。これ程やりがいのあるメディアは他にないと思ってる自分にとっての感想。

山路 家子

8月5日「野口健さんと清掃活動」富士山クリーンツアー」に参加しました。青木が原樹海に一步足を踏み入れるとどんどんゴミが出てきます。今後5年で富士山のゴミをゼロにという野口さん提唱の運動に皆様もお力を！

放送人の会の多くの方々に反対署名をしていただいた玉川上水の放射5号線道路は東京都が強引に測量まで進めようとしています。ハンガーストライキの手段に訴えることになるかも知れません。

ポローニヤでは銀行などの利益の50%は文化、スポーツに寄与することを法律で規定している由（井上ひさしさんの話）、日本の企業もそうしてほしい。夏の夜の夢？

大和 定次

嬉しいことがありました！3年前に出版の拙著「音作り半世紀」の「劇音楽論」の中に武満徹先生の項があります。1965年、先生が35歳の時、職場研修でお話いただいた音響論（私が要約）と1985年、NHKのドラマスペシヤル「おさんの恋」での劇音楽の打ち合わせ時の経験が載っています。それが「武

満徹全集」（小学館・全5巻）の最終第5巻（5月発行）に多少の省略はありますが転載されました。先生の「音響効果論」や「劇音楽論」の一端を知ることができます。

横山 英治

地域と、子供たちと、工業高校で手作りラジオを作ろう！民放労連近畿地連視聴者会議2004をいよいよ8/28（土）大阪府立東日吉工業高校で開きます。このラジオのキットは東大阪市の基板メーカーとメディアに働くものが共同開発し、当日はマンツーマンで子供たちにハンダづけを指導します。

いま韓国ドラマが熱いのは「ものを作る社会」あつてのこと。我々が失ったプライドを取り戻しましょう。そして日本の工業高校教育は設備、人材とも世界一なのです。ここが出発点。

山県 昭彦

パリ島が急速に変化している。日航ホテル、帝国ホテル、ヒルトン、インターナショナルが完全撤退。外国人相手に営業していたデラックス商店街のガレリア・ヌサドアも8月現在閉店6割、年内に全店閉鎖となる。市場ではギブ・ミー・マネーの子供や母親たちの姿が目立つようになった。鉦太鼓で景気がいいと氣勢をあげているのは、もしかしてアメリカと日本だけなのかもしれない。変わらぬのは島の人々の心のやさしさ。しかしそのことがむしろいたく悲しく思われる。

鶺鴒だより⑬ 私の・いくつもの夏

名誉顧問 川口 幹夫

今年の夏はなんとも変だ。東京では三十九度四分なんて肺炎なみのバカ気温があつたと思うと、関東各地はピーカンなのに新潟、福井は大水害。それが終わると今度は四国が水びたしの大騒ぎ。どうやら長年の人間のやりたい放題に自然がガンと鉄槌を下した感じである。

この季節になると私はいつも育った故郷を思い出す。鹿兒島県川辺郡勝目（かつめ）村となりがカツオの枕崎である。枕崎といえば「枕崎台風」。いつも進路に当たるところだったから、家が飛び田畑は水没という有様。中学の大きな体育館がペチャンコになった年もあつた。風水害は慣れっこ、といつてもやはり後始末は大変だ。その頃中学の作文の時間に「私の夢」という題が出た。「台風が日本に近づく前に大型の爆弾一発打って台風を消滅させる」という案が五つもあつて皆大笑いしたことを思い出す。そのことを考えれば、昭和十年代も平成十年代も何も変わらない。

ところで、アテネオリンピックだがこの会報が出る頃は結果が出ているだろう。いつもながら思うのだが、日本人はほんとにオリンピックが好きだ。スポーツ好きと愛国心が一緒になって押し寄せるのだから無理もない。

「BSは全部やる！」NHKまでがこんなキャプションで張り切っている。私の思い出に残るオリンピックは二つある。まず一九六四年の東京オリンピック、この時は私はオリンピック本部に話めてカリカリしていた。

音楽部の若手の一人だった私に課せられたのは、一、東京音頭 二、オリンピックの入場行進曲。五輪音頭は公募の作詞に古賀政男作曲—それも全レコード会社に無料頒布して競作させた。橋幸夫のビクター盤などが有力視されたが、圧倒的一位は三波春夫のテイチク盤だった。うーん納得。

行進曲は古関裕而さんに作曲委嘱。この曲も又、千古に残る名曲となった。そして私の思い出のもう一つはアトランタオリンピック。この時は会長だったので会場に招待された。さて、ことしのアテネの最終結果はどうだろう。又しても胸が騒ぎ、胸が熱くなる2004年の夏である。

放送人墓誌銘

忘れ得ぬ人々

シルクロードに散った友

斉藤 秀夫

親友のディレクター秦正純さんがパキスタンで取材中に亡くなって、早いもので3回忌を迎える。

当時、テレビや新聞のニュースで大きく報じられたので、記憶されているかもしれないませんが、事故は二〇〇二年十月二日NHKスペシャル「ユーラシア・世紀の潮流」の取材中に起きた。中国とパキスタンを結ぶカラコルム・ハイウェイと呼ばれるシルクロードの山岳道路で、秦正純ディレクター、本田清司カメラマン、武内太郎サウンドマン、現地運転手の4人が乗った車は、道路わきの100m以上ある谷底に転落。全員が亡くなったのである。

筆者と亡くなった秦さんとの付き合いは古い。カメラマンとディレクターとして取材チームを組み、1982年からNHK特集「シルクロード」コーカサス編、中央アジア編でソビエト領内深く、延べ200日以上にわたってジープでキャラバンした仲である。当時のソ連領内の取材では、理由が説明されず、突然に取材拒否の連続である。取材の先頭車に乗った秦さんと筆者は、ジープを止め撮影希望を出すたびにソ連側スタッフともめた。都合の良い場所のみを撮影させようとするソ連側と、キャラバン取材

の魅力である、現場での発見を大切に取材したい我々とは毎日のように衝突。余りにも撮影希望を強く要求するので、二人はモスクワから同行しているゴステレ（国家テレビラジオ委員会）のお目付け役からマークされ、モスクワ経由で帰れとまで言われた。取材の自由がないソ連では毎日が苦難の連続で、秦さんとは色々と苦楽をともにした思い出がある。

そんな中で特に忘れられないのは1982年夏、グルジアのコーカサス山中でバスの転落事故現場に遭遇、夢中で救助活動をしたときのことである。早朝の山道をジープで移動中に、定期バスが20mほどの谷底へ転落横転しているのを発見。バスの下敷きになって泣き叫ぶ人、投げ出されて木に引っかかっている人、30人ほどの乗客が助けを求めている。

我々は急いで救助に向かおうとするが、ソ連側スタッフは「外国人は近づけない。撮影予定が待っているから直ぐに出発する」と言う。我々側は「ここで救助活動が出来ないなら、取材を中止して日本に戻る」と主張。その結果全てのカメラをソ連側に預けることで救助活動が許可された。壊れたバスの中から血だらけの重傷者を運び出し、2台の取材用ジープで何回も病院へ運んだ。すでに息のない人もいた。足や腕がちぎれた人もいた。病院へ運ぶ途中、腕の中で息をひきとった幼子もいた。この事故で老人や子供など7人が亡くなったのである。

1時間ほど経つと救助活動が軌道に乗

り、我々は事故現場を離れ取材予定地向かった。するとジープは近くの村の井戸端に止められ、我々はシャツを脱がされた。ソ連側スタッフ全員で、我々の血に染まったシャツを洗ってくれたのである。そしてソ連側の態度が劇的に変わった。それまで私たちの取材に神経をとがらせ、露骨に警戒心を向けていた現地スタッフが初めて心を開いてくれたのである。「有難う」「有難う」と何度も抱擁され、地元の運転手からも自宅の食事に招かれ感謝されたのである。ソ連では西側のジャーナリストはスパイと疑っていたが、今回、互いの心が初めて触れ合ったのである。その後、秦さんと筆者は、ソ連スタッフからもっとも信頼されるようになり、ソ連取材があるたびに参加しないかと声がかかったのである。

秦さんは、NHKの看板番組「シルクロード」「北極圏」「故宮」「街道を行く」「イスラム潮流」「アフリカの21世紀」など、常に大型ドキュメンタリー・シリーズを手がける一方で、単発ドキュメンタリーでも「追跡・核燃料輸送船」「モスクワ冬物語」など多くの名作を残した。志の高い番組作りをする秦さんとは、「生涯現役で番組作りの現場に」と誓い合った間柄である。タフで正義感が強く、弱者に人一倍優しかった秦さんは、我々にとって、取材の原点であるシルクロードの彼方に逝ってしまったのである。あらためてご冥福を祈る。

(NHKテクニカル・サービス)

☆お知らせ

第9回 『名作の舞台裏』

連続ドラマ 『氷点』 (66年放送)

三浦綾子の長編小説ドラマ化はいくつかありましたが、今回はポーラ名作劇場枠(NET 現テレビ朝日)で大反響を得た『氷点』を取上げます。

朝日新聞が創立周年記念として公募した1000万円懸賞当選作のテレビドラマ化(脚色・楠田芳子)。

旭川の大病院の妻(新珠三千代)がふとある男性に心をよせる日々、3歳の長女が通り魔に殺害される。夫は妻への復讐として乳児院から犯人の子をもらいうけ、妻に育てさせる。妻は「陽子」と名付けて愛情を注ぐのだが、「犯人の子」? そして夫の憎しみは? 心の深淵に人間の原罪性を問うといった骨太いドラマでした...

日時 10月30日(土) 13:30~16:30

場所 横浜情報文化センター内

情文ホール(6F)

ゲスト 喜多嶋洋子(旧姓内藤洋子)

北村和夫(文学座)

北代 博(演出家)

橋本 潔(美術デザイナー)

司会 荻野慶人

作品上映(13:45~14:40)のあとゲストをまじえた座談会、観客との質疑応答で進行します。

☆会員の皆様、是非ご参加を!

(入場無料)

◎ 放送界でどうしても忘れられない「戦友」、あるいは心からわが友と声をかけ、わが師匠と呼ぶ、そのような方々との隠れた交遊をのぞいてみたい。編集部までお声をかけてください。

ドラマの匠たち列伝

久野 浩平

今回は試行錯誤を繰り返した創成期を経て、テレビ・ドラマとは何か、その方法論を主体的に模索しながら名作や話題作を残した人びと、60年代の匠たちを紹介しましょう。

まず、岡本愛彦さんの証言です。

岡本さんは一九五〇年、NHKに入局し、放送記者として鳥取局に配属されます。五三年開局と共にテレビ要員としてAKへ移行、テレビドラマ担当になり、一年後にBKに移ります。「証言」では、和田勉さんとの交流や、狂言様式の芸術祭ドラマ『兵六とそばの花』の思い出などが語られます。

「東京から流れてくる番組をみんな、ものすごく真剣に見ていましたよ（中略）。そのうち番組の出来について遅くまでディスカッションがはじまる。テレビとは何か、本質は、と一番単純なことから議論がはじまる……」

五七年、岡本さんはラジオ東京TV（現TBS）に移籍します。「証言」の中心話題はもちろん『私は貝になりたい』について。企画成立までの経緯、制作過程、放送後の反響（例えば右翼の抗議、脅迫など）を語ります。

六三年にTBSを退社し、フリー演出家の道を選びます。六〇年安果以降、次第に右傾化する日本の社会、テレビ局の姿勢への反発と失望とが主な理由でした。次にその内面にも詳しく語っています。

和田勉さん。

五三年NHK入局。テレビ開局直前のBKに赴任します。

「卒論がテレビドラマだったからBKを希望したわけよ。上方でないで勉強できないものが三つあったから。つまり宝塚、文楽、漫才……」

先述のようにBKで岡本さんと職場をともにしたわけで、ここでは和田さんの岡本愛彦論、自作について（『石の庭』『日本の日蝕』など）、また「現代人間模様」枠での仕事、椎名麟三や安部公房など「記録芸術の会」の思い出、一連の松本清張作品のドラマ化をめぐる和田さん一流の弁舌で話してくれました。（注 最近和田さんは「テレビ自叙伝」岩波書店を刊行しました）

蟻川茂男さん。

五一年春、民放設立とともにラジオ東京入社。ラジオドラマのディレクターを経て、五五年テレビ開局でテレビドラマへ。蟻川証言では開局時の目の回る忙しさの中で毎日こなす番組への戸惑いと疑問が語られます。

「あえて言えばゼロからの出発だからね、映画でもない、演劇でもない、伝統なんか何もない世界。そこへブラウン管に映像を映し出して、音声をつけ芝居らしきものをする。セットも作らねばいかん、美術費がどのくらいかかるのかもわからん……」

蟻川証言の中心は『この謎は私ごとく』『刑事物語』を経て六一年から放送の『七人の刑事』の誕生の経緯です。そして石井ふく子さんとの交流、『東

芝日曜劇場』の話題など、TBSドラマの伝統について語っています。

つぎは山本隆則さんの「証言」です。五五年テレビ開局とともにラジオ東京入社。それまでは劇団薔薇座のメンバーでした。

山本さんはラジオ東京で「忠臣蔵の人々」「宇野信夫シリーズ」「青い目の同居人」などを演出、五八年にNET（現テレビ朝日）の開局に参加します。そこで芸術祭参加ドラマ『傷痕』昭和恐慌から東京オリンピックまでの昭和史を綴った連続ドラマ『命ある日を』「妻の日の愛のかたみに」など、高橋玄洋さんとの思い出に入ります。山本さんは残念なことに04年3月亡くなられました。

池田義一さん。東宝演劇部で演出助手を経験したのち、五三年開局を前にした日本テレビ放送網に入社、いきなりテレビドラマと対します。

「もちろん演劇の延長線上にしかなかったんでそれを映像で切り取って行く程度で、映像からモノを創るという考え方はほとんど無かったにひとしいですね」

池田さんの「証言」では内村直也、飯沢匡、今日出海さんたちが参加した初期の実験運動や山本薩夫、市川崑さんたち映画監督による演出など、テレビドラマの方法論の探求への先人たちの協力が語られています。

森川時久さんもムーランルージュの舞台監督から五二年開局した文化放送に入り、ラジオドラマを作るようになります。もともと映画監督の夢をもっていた森川さんはフジテレビ開局を機

に河田町へ移行します。

「当時はナマ放送ですから実際には自分の作品を見ていないわけです。何を作ったか分からないわけです。あるのは自信だけ。自分ではかなりいい物を作っているというような、勝手な思い込みだけでやっていました」

森川さんを語るとき、「証言」の中心は連続ドラマ『若者たち』になります。山内久さんとの出会い、ロケ多用の連続ドラマの苛酷な制約、社会的反響からくる体制側からの圧力、制作中止問題など貴重な秘話に満ちています。『若者たち』は映画化され、森川さんははじめて映画監督を体験し、七六年にフジテレビを退社し、フリーの映像作家の道を選ぶことになりました。最後にテレビドラマについて。

「スタジオに固執すべきだという意見と、いや、せっかく技術が進化したのだから外に出て映画に接近すべきだという、二つの考え方が局の中でありました。で、僕は（映画をやりたかったから）外へでて撮れるものは撮ったほうがいい、という立場でした。でも同時にテレビドラマというのはスタジオのものではないか、という反対の考え方も僕の中に残りましたね（中略）。これだけカメラが自在に使えると制約をつけて、つまりスタジオに戻って、制約の中で表現できるもの、それがテレビジョンじゃないのか……とも思うことがありますよ」

結び。60年代はテレビドラマが、「電気紙芝居」をどうやら克服し、映像表現が茶の間の文化的市民権を得たまだモノクロ全盛の時代でした。

本年度全国地域番組フォーラム 実施方針 経過報告

第2回全国地域フォーラムの開催をめぐっての調整過程で運営上のいくつかの問題点(一つは放送文化基金サイドの30年記念企画に実施時期が重複すること)が出てまいりました。経緯をまとめてご報告させていただきます。

◇ ◇

まず去年並みの催事規模(コンクール方式と2日間にわたるフォーラム)での開催は、本年度はさしあたり見送らせて頂くことにしました。

1. 当会の財政規模では催事運営・動員態勢が去年なみにとれないこと
 2. 予定した支援自治体(横浜市など)や関連諸組織との連動化という調整がタイムリミットに達したこと
 3. 何よりも参加地方局にこれ以上の物心両面の負担がかけられないこと
 4. その前に当会に地方部会を設け、当会との連携と支援態勢という全国的組織化の基盤確立が急務であること
 5. 当会が、「現場」と交流する、という新しい展開(例 フジテレビ現場との番組検討会開催 前頁参照)につながる性質をもつ地方部会を位置付けるための不確定要素を克服すること
- 以上が「地域プロジェクト」が3ヶ月間にわたる作業の共通認識であります。
- しかし、プロジェクトとしては来年度以降に地方志向型の文化イベントを継続させる意味合いで(「番組センター」の意向による年度プログラムとしても)左記のようなラフスケッチを用意し、目下交渉中であります。

1. 地方色豊かな、風土性を現代へ架橋するような作品の公開、それと連動するコーナー展示形式の特別企画を併せ実施する(例えばドラマ『蔵』シリーズや名作ドキュメンタリー作品をテーマのコアにしての公開セッション)。
なお番組センター側との折衝で12月16日(木)および同月25日(土)は借り押さえ中とのこと
2. 地方部会立ちあげの会議。
放送人の会地方部会代表者連絡会議(6地区〜7地区の地方会員代表者)同会議発会日時は12月初旬。具体的な日程・名簿等は追って発表します。
3. 会報隔月発行(来年度)に併せ地方会員の編集(2P〜4P予定)によるページを確保し、例えば地方の提言、情報交換(講師派遣、作家、タレント、制作工房紹介など)などの実践的な場を設けます。

以上が地域プロジェクトメンバーによるご報告であります。(文責 松尾) なお、地域プロジェクトメンバーは鈴木典之(運営担当) 明神 正(折衝担当) 伊藤雅浩(広報担当) 磯村健二(組織連絡担当) 松尾羊一(調整補佐)の構成であります。

蛇足 X「PCのご時世にチャットでサツと地方放送人会議終了とはならねえのかよ」 Y「坂本龍馬は33で死ぬまでに江戸に7回、長崎、神戸、大分へ。旅費はだれが出したのだ」 Z「アゴアシの、せめてアゴ(宿泊)は、オレンチへ泊まって行け、お互いの拙宅利用交換名簿を作ろうか」 Y「賛成だが下戸は気詰まりでいけねえ」と埒もない年寄り奇談が続く夜でした(よ)

ラヂオの広場



「平成ラジオ塾」閉塾に寄せて

山県昭彦

さて、まことに突然であります。この度、「平成ラジオ塾」の活動をひとまず終了させていただくはこびとなりました。

「平成ラジオ塾」の説明から入りま。ご存じのように、60年代後半からラジオ(A.M.)はテレビ時代を迎え、アメリカの都市型ラジオの趨勢に従い、パッケージ編成から生・ワイド・パーソナリティーによる双方向型へ大きく変わり、茶の間からカー空間へ、地域密着型ラジオに変容しました。ためにバブル期をピークにそれなりの存在感と話題性を投げかけていました。

しかし、高齢化少子化、PCやケータイの普及によって、特色であった「軽い文化」の優位性がほころびはじめます。ラジオ業界は、危機感からようやくラジオの存在感、音声のもつラジオ表現の掘り起こし模索し始めます。

スルーではないストック型表現の再評価と見直しは、セミナー方式のアイデア論やマーケット論ではなく、もの作りの現場と直結した番組スキルの伝承が大切だと考えました。

思えば1989年に開塾して以来、ラジオ制作者との直接的な対話形式による、より実践的な《音作り》を第一義に留意し、次世代ラジオを担う現場

のものの作りを陰ながら支援してきたと自負しております。民放祭をはじめ芸術祭など各種コンクールに実績を残してまいりました。

しかしその間、塾を支えてきた仲間、当会会員でもあった上野修氏が鬼籍に入り、歴戦?のわれら塾の運営仲間(島地純氏、松尾羊一氏など)も寄る年波を話題にするようになりました。さなきだに、放送界もデジタル化に向かい、激しい制作環境と条件下にあって新しい展望に現場はどのように対処するか、課題山積の昨今でもあります。折しも、われら3人が所属する「放送人の会」では活躍した放送人を現場感覚で顕彰する通年イベント《放送人グランプリ》個人賞を設けております。しかしながら、ラジオ出身の会員が少ないゆえか、ラジオが対象になつたケースがありません。

そこで提案ですが、来年度から「ラジオ賞」を設立し、全国のA.M.・F.M.ラジオ制作者を選奨したらいかがかと考えております。つまり「平成ラジオ塾」の方向性を《放送人の会》が引き継いでいただき、厳しく優しくラジオ現場人を励ますようにと、賞の一層の発展と充実を期待したいのです。

「ラジオ賞」の実現によるさらなるラジオ活性化の動きを期待しつつ、変わらぬご注目とご支援をお願いし、ここに閉塾と閉講のご挨拶と致します。長い間のご交流、まことにありがとうございます。ごぞいりました。

謹白

第4回 東アジアテレビ制作者フォーラム
『2004 揚州シンポジウム』のご案内

このシンポジウムは、日韓のテレビ放送番組制作者の有志が企画立案し、日韓両国の制作者の親睦、情報交換、番組の交流、共同制作の検討などを目的とし、(財)放送文化基金の助成と援助を基に2001年にはじまった行事です。

第1回、第2回の内容は「日韓新時代」「日韓文化交流」をそれぞれのテーマとし、博多・釜山のフェリー上と、日本の対馬で行い、昨年度の3回からは中国も加わり、3ヶ国にまたがるテレビ制作者同士による「東アジアフォーラム」に発展しました。回を重ねるにつれ新聞、雑誌などの注目するところとなり、シンポジウムの内容紹介が記事化されてきたことは周知の通りです。

ところで、シンポジウム関連の日本サイドの窓口は、今回からはより放送界全体に有意義なイベントとするためには組織機能上、「放送人の会」が最適であると考え、「放送人の会」を中核とした実行委員会の設立が幹事会で承認されました。ちなみに両国は「韓国プロデューサー連合会」「中国電視芸術家協会」が折衝の窓口にあたります。

今回のテーマ：『家族』『環境と生活者』『青少年とテレビ』とし、ドラマ、ドキュメンタリー、バラエティーなどの番組分野から課題や展望について議論を深め、今後の番組制作への飛躍につなげる、という趣旨です。

日程 10月16日(土) 参加者集合→ 歓迎レセプション
17日(日) 開会式 シンポジウム
18日(月) シンポジウム 懇親レセプション
19日(火) 揚州観光(鑑真、楊貴妃などの旧跡など)→ 送別会
20日(水) 帰国 解散(宿泊 新世紀大酒店 4泊5日)

会場 揚州電視台国際会議場

参加作品：1カ国6番組(実行委員の選定による) 計18番組

参加人員：日本から25人程度 内訳：参加番組関係者1番組1～2名 及び一般参加者

主催：中国電視芸術家協会 共催：大韓民国プロデューサー連合会 東アジアテレビ制作者フォーラム実行委員会
後援：揚州電視台

参加条件：放送人の会 会員

参加案内：・参加費用のうち、宿泊費 中国内団体交通費は中国側負担
・中国現地往復旅費のみは、個人負担とさせていただきます。

☆ 参加ご希望の方は、8月25日までに、申し込み用紙にご記入の上
「放送人の会」事務局へFAXにて送付ください。
申し込み用紙は事務局に送付方お申し付けください。

☆ 渡航事情：揚州市までは車で(上海から約4H、南京から1H30M)
日本→上海は成田、関西、福岡の各空港から直行便があります。
南京への直行便は関西空港のみ(週2便)。ただし北京経由は毎日就航。
・空港(上海、南京)から会場までは原則として送迎あり。
(参加者確定次第、送迎等スケジュールはご連絡いたします)

詳しくは実行委の山田 尚(☎3213-1611毎日放送東京支社内)さんへご連絡下さい。

◇なお、人数の制限もあり、また先方の事情などに左右されることもあります。

折角のご要望に添いかねる場合は何卒ご容赦ください。会の日常行動要旨の一つと受け取っていただき、後日シンポジウムの模様などは当会報誌面にて紹介いたします。

会員名簿 2004・8・1現在

- (あ) 合川明 青木裕子 赤井朱美
 秋田完 新井和子 有馬哲夫(い)
 石井清司 石井ふく子 石高健次
 石橋冠 磯野恭子 磯村健二
 市岡康子 一色伸夫 伊藤雅浩
 井上欣也 井上良介 岩澤敏
 岩下恒夫(う) 上田千秋 上野満
 碓井広義 歌田勝彦 宇野昭
 生方恵一 浦田彰(え) 江口展之
 遠藤利男 遠藤ふき子
 (お) 大蔵雄之助 太田敬雄
 大原誠 大原れいこ 大山勝美
 大類 啓 岡弘道 岡崎栄
 岡田晋吉 緒方陽一 岡村黎明
 小川秀夫 沖野瞭 荻野慶人
 小田昭太郎 (か) 加賀美幸子
 各務 孝 片岡敬司 片島紀男
 勝部領樹 加藤滋紀 加藤静夫
 金沢敏子 兼歳正英 金平茂紀
 加納孝夫 上安平冽子 鴨下信一
 河合 肇 川口和久 川口健一
 川口幹夫 河崎 勲 川尻順一
 川竹和夫 川野楠巳 川平朝清
 河邑厚徳 河村正一(き) 岸田 功
 北川泰三 北川信 北出晃
 北村美憲 北村充史 木村栄文
- 木村成忠 木元教子(く) 楠美昌
 王藤英博 国枝忠雄(こ) 小出五郎
 児玉久男 児玉孝光 後藤多聞
 近藤晋 今野勉(さ) 斉藤伸久
 斉藤守慶 斉藤秀夫 斉明寺以玖子
 寒河江正 坂元良江 桜井均
 桜井元雄 迫田朋子 笹川紀久雄
 佐々木欽三 佐々木彰 佐藤年
 佐藤利明 沢口真生 澤田隆治
 沢田隆三(し) 重延浩 静永純一
 渋谷康生 島地純 島野功緒
 清水 満 下川靖夫 下重暁子
 晋田豊 城 菊子(す) 菅野高至
 杉澤陽太郎 杉田成道 鈴木昭典
 鈴木道明 鈴木紀郎 鈴木典之
 須磨 章 せんぼんよしこ(た)
 高尾正克 高島秀之 高橋一郎
 高橋 啓 高橋 泰 滝 大作
 武田光弘 武谷雅博 田澤正稔
 只野 哲 田中昭男 田原英一
 田原茂行(ち) 千葉勉(つ) 露木茂
 鶴橋康夫 (と) 土居原作郎
 戸崎春雄 戸田桂太 外崎宏司
 土門正夫(な) 中川幸美 中澤忠正
 中島 僚 中田美知子 中谷英世
 中津川輝夫 長沼土朗 長野克亮
 中村敦夫 中村克史 中村季恵
 中村耕治 中村美美子 永守良孝
- 難波秀哉(に) 新村もとを
 西ヶ谷秀夫 西川 章 丹羽美之
 (ね) 根津武夫(の) 野崎茂
 野田宏一郎 信井文夫
 (は) 萩野靖乃 橋口義春 林勝彦
 林裕史 原田庸之助 原由美子
 (ひ) 久野浩平 備前島文夫
 一杉丈夫(ふ) 深町幸男 福田雅子
 藤井 潔 藤井チズ子 藤代勝博
 藤田晋也 藤久ミネ(ほ) 星田良子
 堀川とんこう(ま) 松浦幸一
 松尾羊一 松田輝雄 松平定知
 松前洋一 松本明 松本修 松本国昭
 (み) 三上義智 三国 章 水上毅
 水野憲一 満島保夫 三村景一
 三村千鶴 宮川鏡一 宮脇敏雄
 明神正(む) 村上敏一 村上憲男
 村上雅道 村上佑二 村木良彦
 (め) 銘苅栄昌(も) 桃井 章
 森川時久 諸橋毅一(や) 矢島良彰
 藪内広之 山泉昭彦 山崎隆保
 山崎 裕 山路家子 山田良明
 山田 尚 大和定次 山名光紀
 山根基世 山辺麻未 山本恵三
 (ゆ) 湯浅和憲(よ) 横沢 彪
 横山英治 吉永春子 吉村直樹
 吉村誠 (わ) 和田智允 和田光弘
 和田洋一

新会員紹介

左記の方々が入会されました。

・横沢 彪 (元フジテレビE・P)

・現吉本興業取締役(相談役)

・林 健嗣(札幌テレビ報道情報局)

編集後記

記録的酷暑炎昼下、04日本の夏はアテネ五輪、夏の甲子園、人によっては栄養費の巨人モンダイも重なり、加えてプレ戦後60の8・15の季節でもあり、いずれにしろ寝不足気味の夏が過ぎようとしております。

「栄養費」や体操の「6・3・3制」や愛ちゃんの「さーっ」は流行語大賞の候補ですが、栄養費抜きで編集部はめげずにご奉公一筋であります。誤字脱字掃討作戦に没頭。と申しますのも先号のグランプリ項目で受賞者の赤井朱美さまを朱実とした大失態が思い浮かぶからです。赤井さま、ほんとうに申し訳ありませんでした。誌上をかりておわびいたします。(松)

☆ 事務局は月・水・金の午後から「営業」しております(担当 月 北村充史、水 野崎茂、金 伊藤雅浩)。不在の折りは留守電FAXをご利用ください。